

意味の移しかえについて

大江, 三郎

<https://doi.org/10.15017/2332722>

出版情報 : 文學研究. 73, pp.39-53, 1976-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

意味の移しかえについて

大江 三郎

0. 動詞「来る」と「行く」は話し手が主観的に動きを眺め、それを描くための主観性を帯びた動詞であるが、これらの動詞、とりわけ「来る」が補助動詞として用いられると、さらに、描かれる動きは具象的な人やものの動きに限られなくなり、その用法には話し手の微妙な気持が反映されていっそうおもしろくなる。私は「来る」と「行く」とりわけ「来る」の補助動詞としての用法を考えているうちに、意味と言語使用が微妙に接触する「意味の移しかえ」という現象のあることに気がついた。本論の § 1 は、これまでまだほとんど気づかれていないこれら補助動詞のいくつかのおもしろい用法に関連して意味の移しかえの問題を考える。また § 2 は意味の移しかえの問題に関連して、「ばかげた / ている」「すぐれた / ている」などいわゆる状態詞を考察する。この § 2 の問題も結局 § 1 の問題と決して無関係ではないことが明らかになるであろう。

1.0 私は前に、接続助詞テを介して動詞と結びつく補助動詞としてのクル、ユクの用法に、具象的な人やものの（話し手からみた）動きを表わす用法と、人やものあるいはむしろできごと（話し手からみた）いわば非具象的な、あるいはひゆ的な動きを表わす用法と、二種類あることを指摘した。¹⁾ たとえば次の1は前の、「具象的動き」を表わす用法の例であり、2はあとの、「ひゆ的動き」を表わす用法の例である。

1. 鳥が飛んで {a. 来る b. 行く}
2. 恐怖感が次第にうすれて {a. きた b. いった}

ところで～テクル/ユク型の複合動詞²⁾全体が具象的動きを表わすかひゆ的動きを表わすかはテの前の～で示した動詞のなんらかの性質によってかなりよく予知される。またテの前の動詞がクル、ユクの両方と結合するか一方と結合するか、一方と結合する場合そのいずれとかということも、動詞の性質からかなりよく推測できる。上で触れた箇所で行なった分類を次の3に掲げる。

- 3 ① a. 例 歌う、遊ぶ、働く、食事する
 b. 「動き」にかかわる意味的特徴 明白な動きを含まない
 c. クル、ユクとの結合可能性 クル、ユク両方と結合
 d. 生じた複合動詞の表わす動きの種類 具象的動き
- ② a. 走る、飛ぶ、流れる、散る、吹く、出る、入る、帰る
 b. 具象的動き；方向性に制約なし（中性的）
 c. クル、ユク両方と結合
 d. 具象的動き
- ③ a. 離れる、去る、沈む、かくれる
 b. 具象的動き；話し手の知覚範囲内から範囲外への方向性
 c. ユクのみと結合
 d. 具象的動き
- ④ a. 死ぬ、消える
 b. ひゆ的動き——存在から非存在へ；
 話し手の知覚範囲内から範囲外への（ひゆ的）方向性
 c. ユクのみと結合
 d. ひゆ的動き
- ⑤ a. 浮かぶ、現われる、咲く
 b. 具象的動き；話し手の知覚範囲外から範囲内への方向性
 c. クルのみと結合
 d. 具象的動き

- ⑥ a. 生まれる, みえる, 聞こえる, 分る, 疲れる
- b. ひゆ的動き——非存在から存在へ;
話し手の知覚範囲外から範囲内への(ひゆ的)方向性
- c. クルのみと結合
- d. ひゆ的動き

1.1 しかしこの分類は網羅的ではないし、またこの種の分類が網羅的であることは不可能であろう。けれどもそれにしても3の分類では当然問題にすべき～テクル/ユクのいくつかの重要な用法が無視されていることが明らかになってきた。まず、ひとつの例をあげる。

4. 弟はあの日山田先生を訪ねて {a. 来た b. 行った}

5. 鈴木君はあの日私を訪ねて来た

「訪ねる」は3の分類で②の類の動詞であろうが、「訪ねて来る」が同じく具象的動きを表わす～テクルだといっても、4 aと区別される5の用法があるということは示されない。4 aと5における「訪ねて来る」の違いを知るにはそれぞれの(いくぶん不自然な)英訳文を比較するのがひとつの方法である。次の4' aは4 aに、5'は5に対応する。

4' a. That day, my brother came (to me) after visiting Mr. Yamada.

5' (i) That day, Mr. Suzuki came to me and saw me.

(ii) Mr. Suzuki came to see me that day.

「訪ねること」と「来ること」という二つのできごとが、4 aではこの順で起きていることが示される。(「友人のところに行ってきた」にみられるような興味深い形「行ってくる」は4 aの用法のみを有する。)ところが5では二つのできごとがほとんど同時的あるいは同一であることが示される。従って二つのできごとの前後関係に関しては5は4 bの～テユクの文と同じになる。(いうまでもなく4 aも、「私」が「山田先生」

のところ)に位置して「弟」の動きを眺め、述べたとすると5と同じ型になる。)5'(i)は上の事実を直訳的に and による連結文で示している。英語としては5(ii)の方が自然である。³⁾

1.2 ところで、「訪ねる」と発音の同じ「尋ねる」の文で、上の4に対応する6のような文を立てることはできるが、7はみかけの上で5に対応しながら実はそうではない。

6. 弟は山田先生にそのことを尋ねて {a. 来た b. 行った}

7. 鈴木君は私にそのことを尋ねて来た

7は5と違って、「鈴木君」が自ら「私」のところへ動くことを意味することはなく、手紙や電話による質問を意味するであろう。直接鈴木君が動く場合には、「鈴木君は私にそのことを尋ねて来た」あるいは「鈴木君はそのことを尋ねて私のところに来た」というであろう。「尋ねる」はなんらかの仕方で「動き」を示唆する動詞だから、この動きの、「私」の方への方向性を明示するために「来る」の使用が生きてくると思われる。従って同種のなんらかの動きを示唆する他の動詞もしばしばこの種の「来る」を伴う。次の例の「電話をかける」「いう」「伝える」「通知する」がこの種の動詞である。

8. ゆうべ山田さんが電話をかけて来た

9. 山田さんが書店を始めるといって来た

10. 山田さんが書店を始めるとして {a. 伝えて b. 通知して} 来た

7—10におけるテの前の動詞は、上に「なんらかの動きを示唆する」といったが、これらはすべて「ことばの離れた場所への動き」を表わすといえる。そして、この本来の意味がある種の類似を介して「ことばを発する人(文の主語)自身の動き」に移しかえられたとみられる。従って、ここでの補助動詞「来る」は、話し手の方へのこの動きを明確にするために用いられた具象的動きを表わすクルだと思われる。こ

の事実は3の分類では全く示されていない。

1.3 次に、上の3の分類で触れられていない、～テクル/ユクが「具象的動き」を表わさないような興味深い場合がある。

11. 彼はいくたの試練にたえて正しく生きてきた

12. 彼はどんな試練にもたえてりっぱに生きていこう

ここで、本来空間的動きを表わす～テクル/ユクが時間上の動きを表わすように用いられている。つまり空間から時間への動きの移しかえがみられる。クル、ユクの一般的な用法では話し手の「私」が空間的な動きを主観的に眺め描く視点の所在として、いわば空間的に存在している。11, 12におけるようなクル、ユクの用法でも視点の所在としての「私」はある。ただこの場合の「私」は空間的でなく時間的なスケール上の「現在」つまり「発話時」に位置し、時間的なスケール上の動きを眺めているとあってよい。従って、この用法では一般に～テクルは過去または英語の現在完了が表わすような事柄の表現に、～テユクは未来の事柄の表現に用いられる。

11, 12の動詞「生きる」は3の分類でどの類にも入れにくい動詞だが、明らかに①に属する動詞でこの種の～テクルをとるものがある。たとえば「私は30年間大学で英語を教えて来た」と「今日は××大学で教えて来た」とを比較せよ。

§ 1.2ではテの前の動詞に意味の移しかえが生じていたのに、ここではテのあとの補助動詞にそれが起こっているといえることができる。

1.4 やはり上の3の分類でテの前の動詞がなんらかの方向性にかかわるとされた③—⑥のうち、③④⑤の類の動詞ではこの方向性にかかわる性質はその意味の部分とみなすことはできない。たとえば「離れる」「死ぬ」「咲く」が話し手の知覚上のどのような変化を表わすかということはいずれの語の意味の本質とは関係がうすい。また、「沈む」「浮かぶ」は上でそれぞれ③⑤の類の動詞とされ、それぞれユクのみ、

クルのみと結合するとされたが厳密にいうと事実と反する。次の例を検討しよう。

13. その箱は水中に沈んで {a. 行った b. 来た}

14. なにか丸いものが海面に浮かんで {a. 来た b. 行った}

一般に話し手（人間）は水の中でなく外に身を置いて眺めるのがふつうであるという言語外的な知識があるために、13, 14ではaの方が自然と感じられる。しかし話し手が水中に身を置いて動きを眺めるということも決してあり得ないことではない。そのような場面を設定すれば13, 14のbも完全によくある。そしてその場合、逆に「沈む」は⑤の、「浮かぶ」は③の類になるといえる。かくして③④⑤の動詞の「方向性にかかわる性質」とされたものはこれらの意味の本質ではないのだが、しかし、これはまたこれらの動詞の本質的な意味と全く無関係であるとも思われぬ。これら動詞の本来の意味には、この、「話し手からみた方向性」についての性質を話し手が付加することを促進するような要素が確かにあると思われる。補助動詞クル、ユクとの結合はこの「話し手による意味的付加」に好都合な環境である。

1.5 ところが、3の分類中の⑥の類のうち、「生まれる」を除いたものは③④⑤の類とは事情を異にするように思われる。ここにあげてある「みえる」「聞こえる」「分る」「疲れる」のほかにイディオム「のどがかわく」「おなかがすく」も同類とみなされる。これらの動詞に共通してみられる意味的性質は「私的な心理感情」を表わし、アスペクトに関する内在的性質が「程度の増大的変化」だということである⁴⁾。これらの動詞の特徴は一人称主題の省略された、感情を直接的に表現する感嘆文中で助動詞タに終わる現在完了として用いられることである。15, 16が例である。

15. あ, {a. みえた b. 聞こえた c. 分った}

16. ああ, {a. 疲れた b. のどがかわいた c. おなかがすい

た}

17, 18におけるように、これらの動詞は補助動詞クルとのみ結びつく。そしてこの種の～テクルは15, 16のような感嘆文としても用いられる。

17. 次第に原因が分ってきた

18. だんだんおなかがすいてきた

17, 18のような文は、一般に省略される一人称の主題（「私は」「ぼくは」）を有するものに限られ、三人称の主題を有する19, 20のような文は会話文でない、物語文としてのみ可能である。⁵⁾

19. 彼（に）は次第に原因が分ってきた

20. 彼はだんだんおなかがすいてきた

この種の動詞が一人称のみを主題として補助動詞のクルとのみ結びつくということはこれら動詞の意味的性質と無関係であるとはとうてい考えられない。これらがその本質的意味として「話し手によって直接的に経験される話し手自身の私的な心理感情」を表わし、しかもその心理感情の「程度が時間的に次第に増大変化する」ことつまりその心理感情が話し手に次第にはっきりと把握経験されるようになることを表わすのであるから、それが「話し手『私』への方向性を有する動き」に移しかえられるということは容易に推測される。この、移しかえられた性質がクルと結合するのに好都合であることはいうまでもない。

なお15, 16のような型の感嘆文としては用いられないが、同種の動詞表現とみられるものに「みえる」「聞こえる」同様（潜在的または顕在的な）受身心理動詞「思える」「考えられる」などがある。さらに、「淋しい」「悲しい」「こわい」など私的な感情を表わす形容詞の連用形が「なる」をとるもの（またそれに準ずる「心配になる」など）、「疑いが生ずる / つのる / 増す」のような〔名詞＋動詞〕構造、「はっきり（と）する」のような〔副詞＋スル〕構造、などがある。すでにみた

イディオム「のどがかわく」などと同様、これらは日本語が分析的表現を好む傾向を示しているともみられる。21—24はその用例で、17、18と同じ型である。⁶⁾

21. なんだかそれが本当と思えてきた
22. なんだか悲しくなってきた
23. だんだん疑いが増してきた
24. 次第に原因がはっきりしてきた

2. これまでとり上げてきたのは補助動詞クル、ユクの用法に関係した問題ばかりであったが、ここではいわゆる状態詞を問題にする。⁷⁾ 一見無関係と見えながら、ここで考える問題はこれまでみてきた問題、とりわけ § 1.3, § 1.5 の問題と関係を有することが明らかとなろう。状態詞の用法は次の例によって示される。

25. a. あの話しはばかげている
b. あれは実にばかげた話した
26. a. 彼は数学の才能がすぐれている
b. 彼はすぐれた才能の持主だ
27. a. その岩は先がとがっています
b. ここから、先のとがった岩がみえるでしょう

形容詞と同様あるものの性質を表わし、連体修飾語として用いる時々に終わり、陳述語として用いる時～テイルに終わるのが状態詞の特徴である。そして25の場合など想定される「ばかげる」という動詞は存在しないとさえいえそうである。しかし26の状態詞「すぐれた / ている」に対応する動詞「すぐれる」は28にみられるように存在する。状態詞の分化確立度合いには差があるようである。

28. 彼は数学の才において特にすぐれる
- また、「とがった / ている」は27におけるように、あるものの本質的、不変的性質を表わす場合状態詞だが、次の29におけるように除々の変

化を表わす動詞「とがる」も明らかに存在する。

29. その岩は永年荒波に洗われているうちに先が鋭くとがったといわれる

ところで、上でその存在が想定しにくいとされた「ばかげる」という動詞も補助動詞クルと結びつく 30 におけるような用法では極めて自然となる。

30. 彼の小説はいつも終りの方で筋がばかげてくる

「すぐれる」「とがる」も～テクルと結合しやすいことはいうまでもない。31, 32 がその例である。

31. 彼は中学をおえるころから数学の成績が特にすぐれてきた

32. その岩は荒波に洗われているうちに先が鋭くとがってきた
このようなわけで、「すぐれる」「とがる」だけでなく「ばかげる」も動詞として存在すると考えるべきであろう。そして 30—32 での用法からも分るように、これら動詞は「程度の増大的変化」というアスペクトに関する意味的性質を有する。(→ § 1.5)

「程度の増大的変化」という内在的性質を有する動詞として典型的なものに、「ふとる」「のびる」「よごれる」がある。特にここで問題にしたい、この種の動詞の用法は次の各 a—d にみられる四つである。

33. a. あの子はふとっている
b. あの子は (最近) ふとった
c. あの子は (最近) ふとってきた
d. あの子はふとった子
34. a. 髪がのびているね
b. 髪がのびたね
c. 髪がのびてきたね
d. のびた髪
35. a. ユニフォームがよごれているね

- b. ユニフォームがよごれたね
- c. ユニフォームがよごれてきたね
- d. よごれたユニフォーム

これらの用法と、状態詞「ばかげた / ている」「すぐれた / ている」に対応する動詞「ばかげる」「すぐれる」の用法を比べて分るのは、これらがやはり「程度の増大的変化」の動詞だといっても、これにはbの用法がないということである。36, 37は明らかに悪い文である。

36. *彼の小説の筋は終りのところですっかりばかげた

37. *彼は数学の成績が最近非常にすぐれた

36は「ばかげてしまった」「ばかげてきた」、37は「すぐれてきた」とすべきであろう。これに対して38が示すように「とがる」にはbの用法がある。

38. (鉛筆の) しんがこんなにとがった

上の33—35のbや38のような現在完了のタに終る形が用いられるか否かは、結局問題の動詞のアスペクトに関する内在的性質による。「ふとる」「のびる」「よごれる」「とがる」など、この用法の可能な動詞は「程度の増大的変化」のほか、描写するプロセスの終結に注意をひきつける「終結性」(terminative)を内在的性質としてもっている。アスペクトに関するこれら二つの内在的性質のうち前者がきわ立てば33—35のcにおけるように～テクルの形が用いられ、後者がきわ立てば現在完了のタに終わる形が用いられる。「ばかげる」「すぐれる」ではこの終結性は非常に弱いであろう。一般にある動詞のアスペクトに関する内在的性質は複合的であることが多く、脈絡に応じてそのいずれかが支配的になると思われる。たとえば「読む」はふつう「持続性」(durative)の動詞だが、時に「終結性」が支配的になることがある。39のaとbを比較せよ。(下線は文アクセントの置かれる位置)

39. a. その本は今読んでいます

b. その本はもう読んでいます

持続性の動詞がテイルをとると「持続」を表わすが、終結性の動詞がテイルをとると「結果状態」を表わす。39 bは「読んでしまっている」と同義の、結果状態を表わすことが多い。なお、この補助動詞「しまう」は複合動詞全体を終結性の動詞にする。上で、36の「ばかげた」を「ばかげてしまった」にすればよいといったのは当然のことであった。

§ 1.5 でみた「私的心理感情」を表わす動詞「みえる」「聞こえる」「分る」「疲れる」「のどがかわく」「おなかがすく」は～テクルおよび現在完了のタイいずれとも結びつくことから明らかなように、「程度の増大的変化」「終結性」両方を有する。これに対して「思える」「(そんな)気がする」「疑いが増す」などは～テクルとの結合のみ可能であり、内在的性質としては「程度の増大的変化」が支配的であろう。さらに、「驚く」「びっくりする」は次の例が示すとおり、～テクルとの結合にはかなり問題がある。従ってこれらの動詞の支配的な内在的性質は「終結性」であろう。

40. a. ああ、{驚いた/びっくりした}

b. ?私はだんだん {驚いて/びっくりして} きた

40 bも、「その話しを聞いていくうちに」のようなものが文脈的に先立てばよくなる。従ってこれらにも弱いながら「程度の増大的変化」が含まれるのであろう。

以上、前置きが非常に長くなったが、ここで状態詞の問題にもどる。ここで一番主張したいことは、状態詞は決して独自の類を形成するのではなく、他にも例の多い「程度の増大的変化」の動詞として分類されるということである。しかしそれにしても、状態詞といわれる「ばかげた/ている」「すぐれた/ている」が用いられる25、26のような文はどうみても「程度の時間における増大的変化」を表わしているとは思われない。つまり25と30、26と31はそれぞれ関係のない文のよ

うにみえる。それに対して27における「とがった / ている」は32との関連からいっても「時間における程度の増大的変化」を表わすといえないことはない。しかし27の「岩」を「塔」に変えた41の文では「とがった / ている」はものの本質的不變的性質を表わしており、25、26と同類となろう。

41. a. その塔は先がとがっています

b. ここから、先のとがった塔がみえるでしょう

「曲った / ている」についても同様のペアを考え出すことが容易であろう。おもしろいのは「変る」「変った / ている」の関係である。42と43を比較しよう。

42. a. 彼女は最近性格が変った

b. 彼女は性格が変ってきた

43. a. 彼女は性格が変っている

b. 彼女は変った性格の持主だ

42の「変る」はa, bともにいえることから、「終結性」と「程度の増大的変化」両方を内在的に含むとみられる。43のいわゆる状態詞「変った / ている」と42の「変る」とは意味的に関係がうすれてしまっているようにみえる。

このようなデータがありながら、私が、状態詞を程度の増大的変化の動詞の一種として分類しようとするのは、ここにも「意味の移しかえ」をみるからである。つまり「時間上の程度の増大的変化」(動詞)が、「同じ時における他のいくつかのものと比べてのある性質程度の高さ」(状態詞)へと移しかえられたとみるのである。いわゆる状態詞が表わす不變的性質の度合いは、その性質についていくつかのものを相対的に比較し、その比較された程度の違いを変化とみなしてその一点として捉えることも可能である。これに関連して、グラフがひとつのものの時間上の変化を表わすこと(例:ある個人の成長に応じた身長

の変化)も、いくつかのものの相対的比較を変化であるかのように表わすこと(例:あるクラスにおける生徒の身長^の相対的^の違い)もできるという事実を想起すべきであろう。この、意味の移しかえを、私は、「ばかげてきた」→「ばかげた/ている」、「すぐれてきた」→「すぐれた/ている」、「とがってきた」→「とがった/ている」だけでなく、意味的關係がうすれてしまったかにみえる「変ってきた」→「変った/ている」にも認める。「ある人の時間における性格の変化」を「何人かの他人と比べての性格の風変わりさの度合いの相対的高さ」へと移しかえることは容易であろう。この種の意味の移しかえは、実は上にみてきたような「動詞」と「状態詞」がかなりはっきり分化してしまった場合に限られない。次のa, dは動詞「ふとる」の状態詞的使用といえよう。

44. a. 山田君はクラスで一番ふとっている
 b. ? 山田君は最近クラスで一番ふとった
 c. ?? 山田君はクラスで一番ふとってきた
 d. クラスで一番 {ふとった/ふとっている} 子が山田君だ

44 a, dの「ふとった/ている」を状態詞と呼ぶ人はいないであろうが、44と33を比較すれば、この文ですぐ上で述べた類の意味の移しかえが起こっていることは容易に理解されよう。

3. 上の §§ 1.2, 1.3, 1.5, & 2でみた現象を私は意味の移しかえ (semantic transposition) と呼んだが、これはなんらかの「類似」を媒介とする意味の移行をさす。上の例ではこの類似はすべて「動き」や「変化」をめぐるものであったが、ほかのタイプのものもあると推測される。またこの現象は決して日本語に限られないであろう。⁸⁾これはおそらくひゆ (metaphor) の一種であるが、ただ、ひゆが一般にその場限りの恣意的用法を含むのに、この意味の移しかえは極めて規則的、非恣意的である。これは当然意味の歴史的変化の原動力となると

考えられるが、その強い規則性からみて意味の共時的な研究にも欠かせない貴重な概念であると思われる。

次に、類似の把握は言語使用者の話し手、聞き手によるものであるから、この側面には意味論と言語使用の理論、語用論 (pragmatics) との興味深い接触がある。そもそも意味と言語使用とは決して常に峻別できるものではない。ある動きを話し手、聞き手がどう把握するかに応じてきまる「来る」と「行く」の用法はこの二語の意味から切り離すことができない意味の本質的な部分である。これに対して § 1.4 でみた話し手の視点からの意味的付加、語用論的付加 (pragmatic addition) は意味に関連して考察すべき興味深い分野ではあるが、意味そのものとはいえない。本論の中心課題であった意味の移しかえは、意味と言語使用の関係に関して、いわば二つの中間に来るものであろう。

注

1) 大江三郎『日英語の比較研究——主観性をめぐって』(東京、南雲堂、1975), pp. 229-231.

2) (動詞+テ+補助動詞)を「複合動詞」と呼ぶが、これはあまり一般的ではない。

3) この論文の目的と関係がないので詳論しないが、上の3の分類中の①の類の動詞+テクル/ユクは次のAの「食事して来る/行く」のように、テの前の動詞が表わす行為が「来る/行く」の動きの行為に先行することを表わす。

A. 弟は食事して {来た / 行った}

しかし②の類の動詞のあるものは4のa, bと5にパラレルな三つの用法を有する。B, Cがその例である。

B. (i) 弟は海岸まで走って {来た / 行った}

(ii) 弟は私のところまで走って来た

C. (i) 山田さんは(自分の)家に帰って {来た / 行った}

(ii) 山田さんは私のところに帰って来た

4) 大江『前掲書』pp. 196-199.

5) 「会話文」と「物語文」の区別は、主観性を帯びた語の用法に関するいくつかの興味深い事実に関係する。このことについては大江『前掲書』pp. 221-226 参照。

6) 「疑いが生ずる / つのる / 増す」に対して、「疑いがうすれる / 消える / 晴れる」はいわば「消極的な(マイナスの)性質程度の増大的変化」あるいは「程度の減小的変化」を表わすといえる。これも一種の「程度の時間における増大的変化」

を表わすとみれば～テクルと結びつくが、3の分類における④の類の動詞でもあるという点からすれば～テユクと結びつく。次のAはそのことを示す。ただし、～テクルの文(i)と～テユクの文(ii)とは意味が違う。

A. (i) だんだん疑いが消えてきた

(ii) だんだん疑いが消えていった

この論文の冒頭に、ひゆ的動きを表わすものとして出した2の例文もまさに同種の例だったのである。

7) 宮島達夫『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告43), (東京, 秀英出版 1972), pp. 675-678.

8) 英語の、近い未来や意図を表わすといわれる be going to ~ は、起源的には be going in order to ~ から出たといえよう。つまりこの発達はやはり空間的動きが時間上の動きへと移しかえられた例とみられる。I'm going to see him this afternoon. ではまだこの起源的意味が感じられるが、see him のあとに here を挿入した文ではそれは感じられなくなる。しかし、be going to ~ と日本語の未来的な～テユク(例: りっぱに生きていく)との間には、英語の～は未来における目標、到達点を表わすのに日本語の～は未来へと継続する行為を表わすという特徴的な相違がある。(§1.1 および注3 参照)

John Kimball, *The Grammar of Facing*, Indiana University Linguistics Club, 1974 は、英語の例をとおして、最も基本的な「向き」(facing) という概念が時間的、空間的、論理的の三種の空間の記述に重要な役割を果すという示唆に富む考えを述べている。私のこの論文で扱われた問題の、少なくともかなりの部分は、Kimball の考えに基づく方がより統一的に処理されるかもしれない。